

引き揚げの歴史を学び伝えよう

～子ども語り部に挑戦～

平成24年度 舞鶴市立大浦小学校 六年生

1 はじめに

わたし達の校区には、引き揚げの歴史を伝える引揚記念館があります。そして、13年間の長きにわたり、多くの引き揚げ者を乗せた船が帰ってきた、引き揚げ桟橋があります。

わたし達は、総合的な学習の時間を使って1学期から「引き揚げについての学習」に取り組んできました。「引き揚げ」のことや社会科や国語の時間に勉強してきた「戦争のこと」などを中心にまとめてみました。学習してきた順番に、ホームページの原稿をみんなで分担してまとめているので、内容が前後するところもあるかも知れません。

子ども語り部として、わたし達が学んできたことを平和への願いをこめて発信したいと思います。

2 引揚語りの会の方の話を聞いて



☆ シベリアは、冬になると、マイナス50度にもなるという寒いところです。地面は凍っていて、植物は育ちません。そこで抑留者は、強制労働をさせられました。苦しい生活で、食べ物も「黒パン」というすっぱいパンや少しのスープだけです。しかも、働かないともらえませんでした。仕事は木を切ったり、鉄道をひいたりというつらい労働をしていたそうです。休むには38度以上ないとだめだったそうです。やっと夜になり、寝ることができるようになったと思ったら、部屋ではナンキンムシやシラミがいて、寝ることができな

かったそうです。ナンキンムシは、血を吸われると3週間は痛くてねむることができませんでした。また、薬がないので、松の葉をお湯につけたのを飲んだりして、11年間を乗り越えたそうです。今では考えられないことだと思いました。

☆ 昔、約60万人の人がロシアのシベリアに連れて行かれました。とても、寒い所で、人間が暮らしていけるような場所ではありませんでした。

シベリアで日本人はつらい労働をさせられました。少しでも休むと、食事を減らされたり、銃で殺されたりしたそうです。シベリアでは、寒さと飢え、そして重労働で、たくさんの方が亡くなりました。ご飯をもらえる量がとても少なく、黒パンの大きさが1mmでもちがうとけんかになったそうです。



私は、引揚記念館に行ったとき、何枚もの服などを着て、寒くないようにしていたことを知りました。ご飯を食べている様子が再現してあり、人の目が、全員ご飯の方を向いていました。これは、だれかがぬすんだりしないかを、見張っているようでした。抑留者の生活は、私には想像できないぐらいつらくきびしいものだと感じました。

3 引揚記念館の学芸員の方と学習をして



☆ シベリアへは、約60万人の人が連れて行かれました。その内、約5,6万人の人が亡くなりました。シベリアは、マイナス30度から50度のとても寒いところです。寒いシベリアでは、お茶を飲む時も気をつけないと、水筒の口にくちびるがくっついて離れなくなってしまうそうです。下手にはがそうとすると、くちびるや舌がさけて血が噴き出しました。その上、食べ物が少ない中で、一日中強制労働をさせられました。シベリアでは、生きることに必死だったそうです。生きるために、カエル、ヘビ、虫、リス、魚、

草、木の皮など何でも食べました。もらえる食料なんて、馬のえさ以下のまったくおいしくない物を少しだけでした。その少しだけの食料を5,6人で分けて食べます。それだけでは生きていけないので、食べられる物は何でも食べたそうです。

☆ 私たちは、この学習をしたときに、抑留された人たちが、実際に使っていた物を見せていただきました。それは、引き揚げの歴史を伝える、大切な物です。直接手でさわってはいけないので、軍手をしてさわりました。

とてもあったかそうなコートや、飯ごう、手ぶくろ、長ぐつ、水とうがありました。水とうは、今使っている水とうの形とはちがって、丸かったです。



抑留された人たちは、飯ごうを使ってはいたけれど、飯ごうに、食料を入れてもらっていただけで、飯ごうで、ご飯をたいていなかったそうです。どれも、とても古い物でした。シベリアという、とても寒いところで生きていかなくはいけないので、服はあったかそうなものばかりでした。抑留された人たちは、これを使って、きびしくつらい生活をしていたんだなと思いました。



4 引揚記念館を見学して

☆ 私たちは、引揚記念館に見学にいきました。そこで引揚語りの会の方に引き揚げやシベリアでの生活について教えていただきました。

引揚記念館には、シベリアに連れて行かれた時のようすや収容所での暮らし、そして、当時使っていた水筒や飯ごうなど引き揚げに関する物が展示してありました。



シベリアの収容所では、生活するための品がほとんど何も与えられませんでした。連れて来られた人たちは、スプーンや箸などを手作りしました。収容所での食事を再現している展示物やその時食べていた物や日記なども展示してありました。日記は紙のかわりにしらかばの木の皮で、ペンは空き缶で手作りされていました。



☆ 引揚記念館には当時使っていた持ち物などが展示してありました。

シベリア抑留で60万人もの人々がシベリアに連れて行かれ、強制労働させられました。与えられる食べ物は、とても栄養が少なく、お腹がとても減ったそうです。食べ物は朝から夜まで

の仕事をやり切った人だけが、食べ物をいつもより多くもらえました。けれど、100%の力は使わない。食べられる物を探し、命をつなぐために、草、動物、雑穀などを食べたそうです。

日本に残された家族は、戦争が終わったのに帰って来ないと心配しました。引揚記念館には、当時使っていた持ち物などが展示してありました。古い道具は木や金属で持ち物は布やかたそうな物で、どちらも使われてれよごれているようにも見えました。

5 中田在住の方から話を聞いて

☆ ぼくは、中田のことを聞きました。昔の中田の村は、大浦小学校の近くにあったそうです。中田は引き揚げ者がわたる栈橋の近くにありました。海兵団の施設をつくるために、国が中田を強制移転させたので、今の場所になったそうです。それでも、中田の人たちは、引き揚げ船が来るたびに、お迎えに行ったそうです。遠い他府県から来た人を何度も泊めてあげたり、お花をあげたり、やさしく声をかけたりしたそうです。



☆ 引き揚げ当時、平には、引き揚げ援護局という引き揚げ者を受け入れる施設がありました。引き揚げ船が入ってくると、小学生も中学生も授業を取りやめて住民も一緒になってお迎えをしたそうです。引き揚げ者の遺骨を受け取る時には、「おかえりなさい」、「ごころうさま」と言って、迎えていたそうです。

引き揚げ船が港に入る日には、引き揚げ者の兄弟や、親などが遠くから迎えに来ました。そのときには、港の近くの人の上に泊めてあげたり、花をわたしたりして、温かく接したそうです。

引き揚げされた人、また、その人の兄弟や親などを中田の人達も、心良く、温かく、迎えたそうです。



6 献茶式に参加して



☆ 大浦小学校の代表として、舞鶴市が毎年行っている献茶式に参加しました。そこで、平和へのメッセージを読みました。引き揚げの歴史を語り継いでいかないといけないことを改めて強く感じました。

7 夏休みに戦争のことを調べて

☆ ぼくは夏休みに家族から戦争の頃の話を知りました。昭和16年(1941年)12月8日から、太平洋戦争が始まりました。当時は食料が少なく、主に配給された米を食べていました。この米を使って餅にしたり、餅の中によもぎなどを入れたりして食べていました。学校では、後ろにある山から土を運んで、校庭に畑を作り、そこにサツマイモを植えて、食料にしていました。

この頃、舞鶴で空襲がありました。小橋では、大敷網漁をしていた人が、この空襲で飛んできたアメリカのB29という戦闘機に攻撃され、漁をしていた2、3人の人が亡くなったそうです。

空襲が激しくなると、街は、火の海になり、海に逃げるしか助かる方法がなく、たくさんの人が海に逃げたという話を聞きました。

☆ アメリカは原爆投下のための作戦を進めるために1945年7月29日8時36分、アメリカの爆撃機B29と呼ばれる爆弾を積んだ飛行機が2機やってきて、当時の舞鶴海軍工廠の鉄道引込線のあたりに1発の爆弾を投下しました。

この爆弾は強大な爆発力をもっていました。爆発すると付近の建物は爆発で吹き飛ばされ、武器

をつくるために働いていた女子学生をふくむ97名が死亡。百数十名が重軽傷という大きな被害を受けました。

当時は、この大きな爆弾1発だけ投下されたことを不思議がられていました。しかし1991年の調査で、原爆模擬弾と呼ばれる爆弾で原爆を投下するための訓練として行われていたことが分かりました。これが舞鶴空襲と呼ばれている話です。

8 社会科で戦争のことを学習して

☆ 私は、社会でアジア太平洋戦争について勉強しました。この戦争では、日本が軍事同盟を結んだイタリア、ドイツと連合国軍の中国、アメリカ、イギリスとが戦いました。この戦争は、とても激しい戦争でした。

多くの男性が戦場に行っていたので、小・中学生や女性が、軍需工場で働いたり、航空機工場で作ったりしていましたが戦争が激しくなると、都市の子供たちは、親と離れて地方の寺などで集団生活をする、集団疎開がありました。食べ物は不足していて配給制になりました。配給された食べ物は少なく、みんなお腹をすかせていたそうです。空襲では、爆弾を落とされたりして、とても危険な暮らしをしていたそうです。

☆ 社会の勉強でアジア・太平洋戦争の勉強をしました。アジア・太平洋は、日本軍がハワイの真珠湾にあるアメリカ軍基地を攻撃して、始まった戦争です。

日本とアメリカ、イギリスなどの連合国軍との戦争でした。この戦争で日本人は、約310万人の人が亡くなりました。戦争に行っていない女の人は、工場で作ったりして、国のために、がんばっていました。

食べ物も配給制で米や砂糖、みそなどの物が少しだけしか食べられなかったそうです。

この戦争で、日本は負けてしまいました。

戦争に行った人も、日本にいた人もつらい生活だったことを感じました。

9 国語の「平和のとりでを築く」を学習して

☆ 国語で「平和のとりでを築く」という話の学習をしました。8月6日広島に原子爆弾が投下されました。そのたった1発の爆弾で川がうまるほどの死者が出たそうです。その原子爆弾は、今という『原爆ドーム』の約600メートル上空で爆発したそうです。

『原爆ドーム』は全焼し、痛々しい姿となりました。この建物を残しておくことに対する反対の声も多数ありました。でも、10数年たって被爆が原因とみられる病気にかかった少女の日記に「原爆ドームは恐るべき原爆を後世にうたえてくれるだろう。」と書いてあったことで永久保存が決まりました。

私は、この話を読んで、「平和のとりでを築く」とは、人々の心の中に平和のとりでを築くこと、2度と戦争をしない世の中にするために平和の大切さを伝えていくことなのだと感じました。

☆ 国語の授業で、原子爆弾が広島に落とされ、大きな被害を受けた話を勉強しました。原子爆弾が落とされたことで、とてもたくさんの被害を受けました。

ある一人の少女の日記に原爆のことを後世に残して欲しいということが書いてありました。この少女の願いで原爆のことを保存することが決まりました。そして、日本は世界遺産条約という条約を結びました。広島では、原爆ドームを世界遺産にしようという動きがありました。その後、原爆

ドームは補強工事などを行いました。

その後、原爆ドームは世界遺産に選ばれました。世界遺産のなって残された原爆ドームは、これからも、ずっと戦争の悲惨さを伝え、平和の大切さを伝え続けるものだと思います。

1 0 世界遺産登録を目指しての取り組み



☆ 舞鶴市は舞鶴引き揚げ記念館の貴重な資料を未来に伝えるために「ユネスコ世界記憶遺産」登録への取り組みを進めています。平成26年3月に申請し、27年の登録を目指しているそうです。

舞鶴は13年間にわたり、最後まで大陸からの引揚者を受け入れ、その数は約66万人にのぼります。引揚記念館は引き揚げやシベリア抑留に関する貴重な資料約1万2千点を所蔵し、部の展示などを行っています。

しかし、戦後70年近く経過して引揚者が高齢化し、引き揚げの事実を知る人も少なくなってきました。世界記憶遺産への登録を目指すことで、改めて広くアピールすることにしたそうです。

1 4 学習を終えて

☆ 引き揚げの学習をして、戦争はいけないことだと強く思いました。ソ連の人は、寒いシベリアに鉄道をつくらうとしました。中国の満州にいた日本人を日本に戻

してあげるとうそをつき、強制労働をさせました。たいへん厳しい生活を何年間も、日本に帰れないまま続けさせました。人をだまして自分のしたくないことを無理やりさせたりするのは、絶対いけないことです。人を大切にすることを考えていたら、世界の人が平和に暮らせると思いました。暴力、暴言、無視、いじめをなくすなど身近なことから、取り組んでいきたいです。

☆ シベリア抑留は、戦争が終わってから起こったできごとなので、戦争はおそろしいものだと思います。ぼくは、戦争はいけないことだと思います。ぼくは、戦争につながる、いじめのようなことは、決して許してはいけないことだと思います。

これから、ぼく達が語り部になって、引き揚げの歴史を伝えて行かなければいけないと思います。

☆ わたしは、平和について考えて、平和とは日常のあたり前の生活を家族といっしょに幸せにできることだとおもいます。シベリアに連れて行かれた人は、このあたり前のことができなかったのです。今、こうやって家族といっしょに幸せに生活できるのは、平和なことだと思いました。

戦争は、人の幸せをこわしてしまうものです。あたり前の平和な生活をうばってしまうものです。この引き揚げ学習をして、戦争のこわさを知りました。シベリア抑留の話のを忘れずに、これからも伝えて行きたいです。

